

くるまで周遊記

日本各地 5年(1974~79年)にわたる
くるま旅 青春の会



著者・絵

川津 茂夫

編集 製作

美術の図書 三好企画

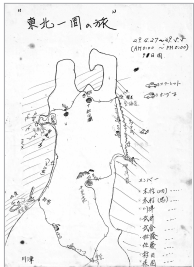
くるまで周遊記
日本各地 5年(1974~79年)にわたる くるま旅
青春の会
目次

まえがき

川津 茂夫

P.4~6

*



〔第一弾〕東北一周の旅

昭和49(1974)年4月27日~5月5日
9日間

〔メンバー〕

加藤裕子、川津茂夫、木村 功、木村忠二、
佐藤治代、武井幸次、武倉町子、村田、
森園一子 (50音順)

P.7~40



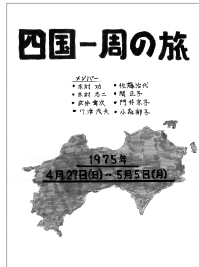
〔第二弾〕北海道の旅

昭和49(1974)年7月26日~8月3日
9日間

〔メンバー〕

川津茂夫、木村 功、木村忠二、武井幸次、
沼井律子、森園一子 (50音順)

P.41~50



〔第三弾〕四国一周の旅

昭和50(1975)年4月27日~5月5日
9日間

〔メンバー〕

門井京子、川津茂夫、木村 功、木村忠二、
小森郁子、佐藤治代、関 正子、武井幸次
(50音順)

P.51~70



〔第四弾〕能登・北陸・中部
一周の旅

昭和51(1976)年4月28日~5月5日
8日間

〔メンバー〕

川津茂夫、木村忠二、熊田 健、森 盛一
(50音順)

P.71~88



〔第五弾〕九州一周の旅

昭和52(1977)年7月29日~8月8日
11日間

〔メンバー〕

川津茂夫、木村 功、木村忠二、森 盛一
(50音順)

P.89~114



〔第六弾〕北海道一周の旅

昭和54(1979)年7月28日~8月7日
11日間

〔メンバー〕

大野洋子、河島節子、川津茂夫、木村 功、
木村忠二、熊田 健、根本勝美、野崎由美子、
森 盛一 (50音順)

P.115~185

*

編集後記—(1979年に纏めた「北海道一周の旅」の編集後記)
川津 茂夫

P.186~190

〔第七弾「近畿・南紀一周の旅」のお誘い〕
P.191

くるまで周遊記

〔旅の記録ファイルから〕

P.192~217

まえがき

この記録は、今から遡ること40年以上前の旅の記録です。

1974年当時、日本社会、経済は高度成長時代後半にさしかかっていました。「日本列島改造論」なるものが政治の中心になった時代。企業優先の政治、経済が横行し、私たち庶民の暮らしはというと貧富の格差が拡大し数多くの要求が渦巻いていました。

この時代の世相をみると、当時はまだ、今日日常に使用している携帯電話なるものは無く、各家庭に設置の「ダイヤル式黒電話」「街中や駅前に設置された公衆電話ボックス」「たばこ屋の店先や銭湯などに設置してあった公衆電話」（10円玉などのコインを入れて通話する赤色やピンク色、緑色したダイヤル式と押ボタン式公衆電話）が通信手段であった。また、現在の様な交通アクセスや利便性も薄く、道路は今日当たり前になっているきめ細かな高速道路網は無く、「東名高速」「名神高速」「山陽自動車道」「中央自動車道」など一部が開通。「東北自動車道」は岩槻・仙台間のみ。鉄道も「東海道新幹線」の東京・名古屋・大阪間、「山陽新幹線」の大阪・岡山間が開通していた。コンビニエンスストアの店舗も少数で個人経営店舗が主流、各地の商店会が賑わった。電子書籍なるものも無く、ネット通販なんてない。書店、古本屋にお世話になったのも数えきれない。

そうした世相、環境を背景に私たち、職場の労働組合活動や労働運動を通じて知り合った仲間たちが、日々の暮らしから少し離れて、日常とは違った「冒険と挑戦」の欲求とともに①社会・世間をもっと知りたい、②日本各地に行ってみたい、③何かを成し遂げてみたい、④沢山の各地の人々と話してみたい、などの目的を持っての「日本一周めざした旅」の計画がはじまった。

最初の「東北一周の旅」は発想してから1年、企画してから半年後、当初企画に参加したメンバーもそれぞれが仕事を持ち、働きながらの準備や数回の打ち合わせを行なった。

その後、「東北一周の旅」を皮切りに第2弾「北海道の旅」第3弾「四国一周の旅」、……と続き、第6弾「北海道一周の旅」まで文字通り「日本一周」めざして実行してきました。

このたび、私たちのこの日本一周めざした「旅の記録」を改めて保存しようとするきっかけとなったのは、2019年秋に九州・鹿児島から40年ぶりに上京された方と、数名の旅行メンバーが顔合わせした際に、当時の旅の話題で盛り上がり、その席で各々転居や生活環境の変化から、残念なことに「記録や写真が残っていない」「記憶も薄れてきた」と意見が出され、「当時の旅の記録をもう一度見たい」の要望から、毎回旅に参加し当時記録係りとして担当を任された川津が自費出版で製本化することになりました。

「計画段階の打合せ記録」「皆で書いた日記」「旅行当時の写真」「各地の入場券・記念券」など、お蔵入り資料の掘り起こし、連絡のとれるメンバーへのヒヤリングを行いました。またある時は、とくに初めの「東北一周の旅」の計画資料などは現在のようなコピーではなく「青焼き」と言う感光紙を使ったコピーの為、印刷文字が黒ずんで解読しにくい状態で、とくに手書きで書いた地名、名称などが不鮮明で、それらはネットで調べ、また現地の観光協会や行政に問い合わせるなどで、原文に忠実に正確に表現する努力をしました。

残念なことに第2弾「北海道の旅」第3弾「四国一周の旅」では、「旅の記録・日記・写真」の私的な保管資料に乏しく、計画段階の資料がかなり残っていません。この「日本一周の旅」目指して参加されたメンバー19人、延べ人数にして40名となりますが、その後の転居や電話番号が変わるなどで約半数の参加者と連絡が取れず出版を伝える事が出来ていません。

かつてこの旅をしていく中で、ある「ものの本」に、“物語は常に次を創造させる”と記されていたことを思い出した。

つけ加えて、この記録から「こんな旅のやり方も在るのだ!」「こんな仲間たちもいたのだ!」と知っていただければ幸いです。そして何かのお役にたてればもっと嬉しいです。

日本一周めざした車で旅も日本の隅々を巡る完全な一周ではないため、「くるまで周遊記」と題し、「日本各地 5年にわたるくるま旅・青春の会」と印しました。

次にこの旅の系譜を記します。